

# はじめに

---

ただ、自分として生きたい  
それだけなのに  
なんでこんなに苦しいんだろう。

適合の世界にどっぷり浸かっていたことに気づき、  
もうそんな世界は嫌だ。と  
一步一步と歩き始めた頃。

私の中から強烈に湧いてきた思い。

でも、

私がわたしとして生きれなかった時  
私はものすごく自分のがっかりする。  
悔しいし、情けなくなる。

私はわたしとして生きれないことが  
何よりも悲しいんだ。

私はどストレートに自分として生きたいんだ。

だから私はゾンビのように何度も立ち上がる。  
失敗したって間違ったって情けなくたって  
やっぱりリングには立ち続けたい。

そして、ある時私は決めたのだ。  
わたしとして生きることから一步も譲らない。と。

2020年の冬、この旅は始まった。

仕事用のプロフィール写真を  
撮っていただくことをきっかけに、  
フォトグラファーの東山弥生さんと出会いました。

私がおわたしとして自然に在る中で

私の中にある魅力を力を  
嘆きを悲しみを苦しみを喜びを幸せを  
写真を通して見せてもらえる  
弥生さんの撮影にとっても魅力を感じて  
継続撮影に申し込みました。

今振り返ると、  
この継続撮影の旅は、

これまでいないことにしていたわたしを  
切り捨ててきたわたしを  
見つけにいくための、  
仲直りするための、  
ハグをしにいくための、  
私からおわたしへの愛、Loveそのものでした。

実は  
愛、loveは  
私には1番程遠いものだと思っていました。

でも、このフォトエッセイのテーマを決める時  
息子があるプレゼントをくれた。

ギャルかよ！とツッコみたくなる  
キラッキラのLOVEとデコられたハートのキーホルダー



手にして見ると、引っかかる  
love、、、

自分の写真を見返すと  
もう、これはloveじゃん。  
loveしかないと思った。  
だからどストレートにloveで勝負する。

# じゃあ、その

## “自分”ってどんなの

---

当時、私は「自分を出したい。」と思っていた。  
自分の中に疼いていて、出たがっているものを  
外に出したかった。

でも、その自分を出したいの“自分”ってなに？って  
聞かれると、口ごもってしまう私が出た。

自分の中にあるものがわからない。  
どう出したらいいかわからない。  
でも、それが始まりだったんだと思う。

だって、  
出したらやばいことになってしまうと思っていたし、  
出したらいけないものだと思っていた。

そりゃあ、わからないはずだ。

それまでの私を作っていたものは  
誰かに言われた言葉や、  
誰かに求められている像だったり、  
自分の中にある一部と  
社会で求められる、認められるものとを  
なんとか摺り合わせたものだった。

でも、もうそれらを剥がして出たがっている。



---

もう、笑わなくても  
大丈夫だよ

---

そう、写真に写る自分に  
言われた気がした



みつけた

---

---

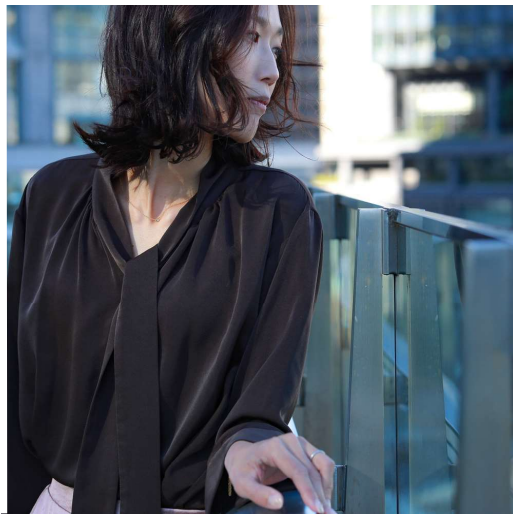
まだ、言葉にはできなかつた。  
でもこの写真から  
私はわたしの中にある  
強さを感じた。

## わからない。けど、わくわくする

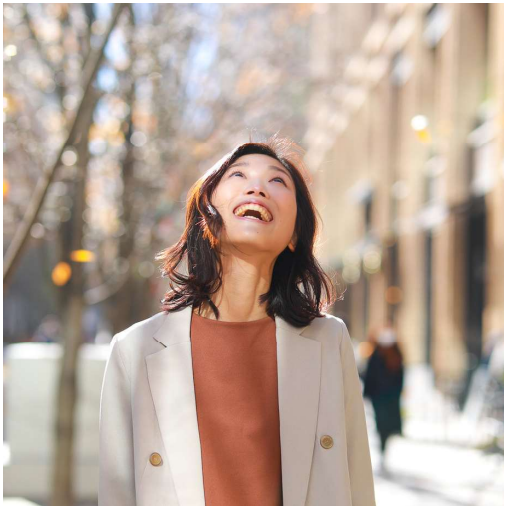
わからないながらも、私は自分の中から湧く喜びのまますぐに洋服を探しに行った。

そして初めての撮影から一週間後、贅沢に3セットの洋服をトランクに詰めて撮影に向かったのだ。











私はわたしにドキツとした



# 暴力的な強さを思い出す

---

私はずっと自分を弱い人間だと思っていた。

小学校2年生の時のある出来事をきっかけに、  
私はわたしの中にある強さを閉じた。  
自分を殺した。

もちろん、  
当時はそんなことを自覚なんかしていない。  
目立たないよう、邪魔しないよう、壊さないよう  
それが一番だった。  
自分の中にある暴力的な自分を破壊的な自分を  
隠すことに必死だった。

でも、あるものはある。  
だから、私の中にはパワーが溢れてくる。  
それなのに、どこに出したらいいかわからない。

そうすると、  
行き場のいなくなったパワーが  
私の中で強烈な怒りに変わっていった。  
反抗期と重なり、物凄いパワーで母親にぶつけた。

自分を出すか殺すかの二択。

それは、残念ながら  
そんなことがしたいわけじゃないのに、  
どうして自分はこうなんだろうって、  
ますます自分を否定することを強めることになった。

どんどんどんどん自分のことが嫌いになっていった。  
どんどんどんどん弱くなっていった。

大好きな家族の大きな病気、大好きで懂れていた親族の自殺、それから私の大好きで大事な親族の死がどんどん重なっていった。私自身が何か辛い出来事があったわけではないが、大好きな人たちが傷ついていく姿を見ていると苦しくて、力になりたいのに何も力になれない絶望、でも同時にそんな辛い現実から目を背けたい弱さも私の中にあって、心に、感情に蓋をしていないとどうしようもできなかった。

次第に私も精神的に病み、仕事を辞めた。  
人に会うと、疲れてしんどくて、感情を感じないように、出来るだけ人に会わないように過ごしていた。

どんどんどんどん自分がわからなくなる。  
どんどんどんどん小さくなる。苦しくなる。

私の中にある火が消えそうだった。

そこから  
私の自己探求の旅が始まるのだが、  
大きな転機になったのは、息子が生まれたこと。  
子育てをしている中で、  
爆発的な感情がおさまらない自分が出てくる。異常だった。  
自分はおかしい。そう、思った。

今思えば、  
私の中で閉じたパワーが刺激されていたのだと思う。  
それは荒々しいバケモノのようだった。


荒々しい暴力的な、破壊的な自分を受け入れるのは苦しかった。  
出してしまったらどうなっちゃうのか、こわかった。

鎌倉での撮影に向かう道中、タイミングを狙ったかのように、  
まさに暴力的な、破壊的なわたしが  
大人げもなく、大人なのに、、友だちと喧嘩した。

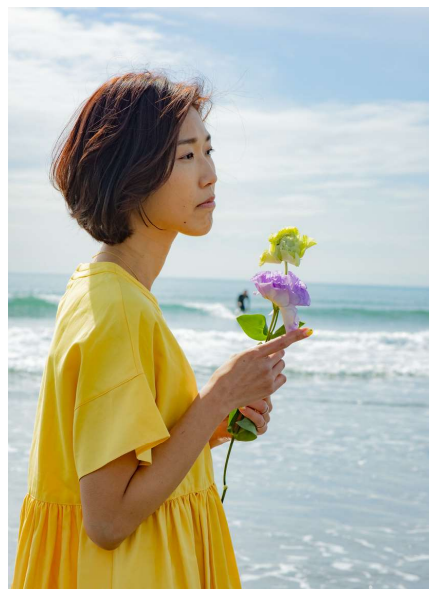
依存心につけこむ社会と、  
自分より下だと思える人を見つけて安心する社会に腹が立ったのだ。  
そして、物凄い強さがあるのにそれに気づかない友達に。



わたしの中に愛はあったのだけど、  
あまりにも未熟だった。悔しかった。情けなかった。

A close-up photograph of a person's lower legs and feet. They are wearing white, wide-leg trousers and a light blue jacket. The person is standing on a sandy beach with scattered small rocks and shells. The background is a soft-focus view of the ocean and sky.

でも、  
『私はわたしのことをもう嫌いになりたくない』







いったり  
きたり











未熟なこの子と一緒にいこう。  
この子と一緒に育っていこう。

そう思った。